

昭和29年1月

「田崎真珠商会」創業

戦後9年、当時の日本はまだ

戦争の爪あとを残しつつ

新しい時代にまさに突入していた



海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

~King of Pearl~ Syunsaku Tasaki Story

田崎俊作物語


〈第五話〉

漫画：佐藤晴美


「もはや戦後ではない」と経済白書が
発表する2年前、田崎真珠は

神戸市葺合区（現在の中央区）のアパートの

一室からスタートしたのだった




当時、台風により
伊勢や四国の真珠養殖場が
大打撃を受けた少し後のこと
真珠が品不足となったこの頃が
独立のチャンスだった



田崎さんが独立
されるなら
私もお手伝いします

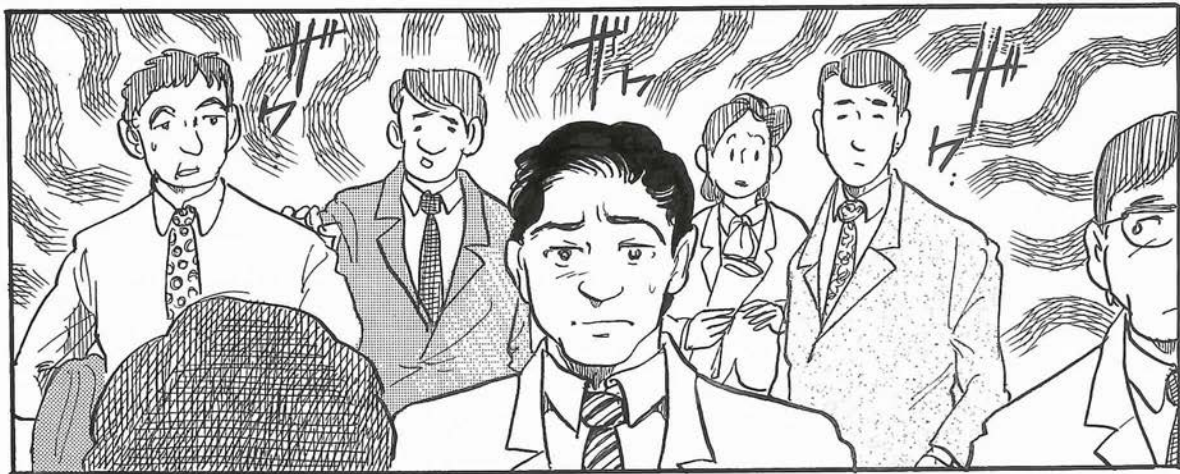
妻である禮子
そして鄭旺真珠とともに働いていた
従業員で真珠加工の高い技術をも
っていた中尾タケノとともに
田崎真珠商会はスタートした



しかし、松原にいる父は
資金援助をしてくれないのももちろん
真珠を売ってもくれなかった











当時は資金もなく
銀行も相手にしてくれないので
養殖業者から仕入れた珠は
半分は浜揚げ珠のまま転売し
半分は加工にまわした

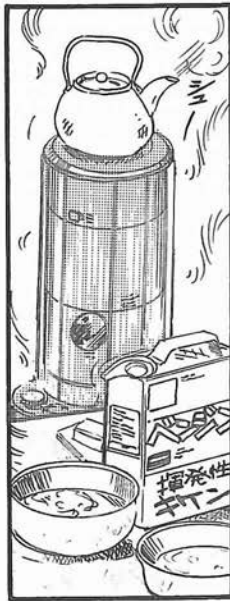


例えば養殖業者から
600万円で買った浜揚げ珠の半分会
350万円で売る。その50万円が
経費となりこれで多少の余裕ができて
残りの珠をネックレスや指輪に
加工して売るといふ商売だった



このアパートも
手狭になって
きたな…
新しく事務所を
見つけるか…







海軍兵学校で
きたえられた
「自立・自治・自啓」の
精神——
田崎にはいつもこの精神が
そなわっていた



大火も恐れず
飛び込んでいったのも
この精神が後押し
したものだ

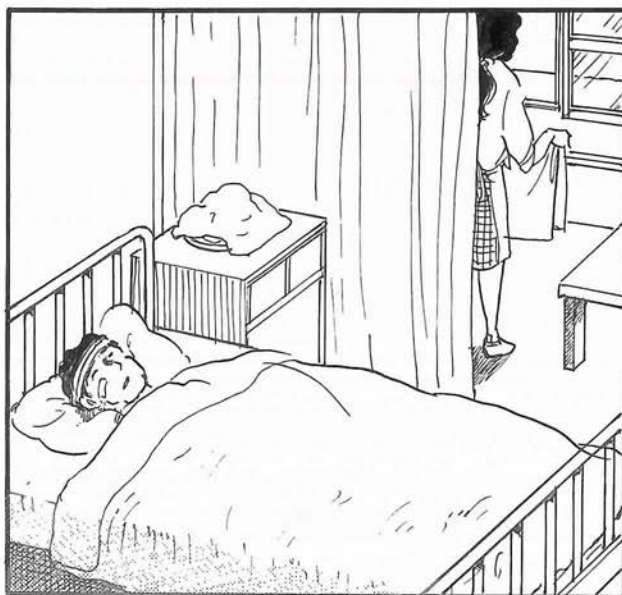


あなたッ
やめて



せつかく仕入れた真珠が！
おれの真珠がッ！







新子さん

出石 アカル

絵 菅原洸人

題字 六車明峰

「菅原洸人さんと握手しました。握手の中に出石さんがいらして、二人でぎゅっと押しつぶしました。痛かったですよね？」

数年前に神戸の文化賞を受けられた時の新子さんの言葉である。この欄の絵を描いてくださっている洸人さんも一緒に受賞だったのだ。

その新子さんが亡くなった。

一昨春秋、「ジ・エンド近しですが、もうちょっとだけうろろするかもしれません」との便りを頂いて以来、少々の覚悟をしていたことではあったがわたしは淋しい。淋しくて仕方ない。

時実新子。現代川柳を代表する人だった。川柳の世界に一時代を築いた人だった。「川柳でんでん太鼓」「道頓堀の雨に別れて以来なり」など川柳関係の著書を多く持ち、川柳に造詣が深い田辺聖子さんは「川柳界の与謝野晶子」と呼んでおられる。

その新子さんが、「洸人さんの絵も味があつていいですねえ。ぜいたくなページです」などと、この欄にいつも優しい言葉をかけてくださり、時にはわたしの駄文を「感動しました」と熱く支持してくださった。また、ある失敗作には「役者が自分で面白がつてはどうか？ 読者は他人ですからネ。毒舌多謝」などとの確な批評をくださる人もあった。

新子さんとの交流は、わたしが六年前に出した詩集『コーヒーカップの耳』を彼女がおもしろがってくださったことに始まる。

当時、新子さんは『デイリースポーツ』に「男たちよ！」のタイトルでエッセーを連載しておられた。彼女は川柳作家だがエッセーの名手でもある。スポーツ紙は喫茶店にはつきもの。わたしはその欄のファンだった。

そのページを担当していた記者が、坂本昌昭さんという人で、この人を通してわたしの詩集を新子さんに献上したのだった。

この坂本さんも胸の中に熱いものを秘めた人である。

この四月二十二日、「時実新子さんをしのぶ会」が小雨ふる神戸で多くのファンを集めて催された。その献花の時のことだ。参加者は順次それぞれの思いを込めて真紅のバラを一本ずつ献じたのだが、かの坂本氏は、献花台には乗せず、びっしりと飾られた白一面の菊の群れの中に差し込んだのである。一点の滴るような赤！

帰りに、「新子さんと三人で飲もう」と立ち寄った居酒屋で彼は、「新子さんに、白ばかりは似合わないから」とつぶやいた。

話を戻す。

新子さんと直接お会いしたのはたったの一度。

平成十六年六月六日、ハーバーランドのホテルニューオータニ、鳳凰の間。「時実新子文業五十年今、」と名付けられた祝賀会でのことであった。

参加者二百名を超える盛大な会で、「別荘」から出て来られた直後の、あの角川春樹氏も出席しておられた。そのステージから一番近い席にわたしは座らされていた。

プログラムの中で、新子さんがバイオリンの生演奏をBGMに、自句を朗読された。

その二句目のことである。「目的はあなたにあった旅をした」が本来の句である。それを彼女は、こともあろうに、スポットライトを浴びる

中で、わたしをズバリと指さし、「目的はあなたにあった恋をした」と詠まれたのだ。わたしに余裕があれば、「夫を殺してゆらりゆらりと訪ね来よ」と応じるころだが、この強烈な不意打ちのアドリブにわたしは思わず卒倒しそうになった。その場に居合わせたご主人の六郎さんはじめ、熱烈なるお弟子さんたちに、よくもたたき殺されなかつたことである。

その会のあと、彼女から葉書が届いた。

「私は出石さんに、『初めまして』の気分はまったくありませんでした。ずいっと前から、前世からの友人のあたたかさをじんじんと感じました。来て下さって、うれしかった。幸せでした。」

お会いしたのはこの一度だけ。まさに一期一会であったが、前後六年間の文通の間、時に電話で話したりして本当にいつも会っている思いがしていた。

手元に、新子さんからの私信の束がある。読み返してみると、さすがに短詩型の世界に生きた人、手紙と言えどもその文面には一切の無駄がない。

切れ味鋭く、さらに愛情とユーモアにあふれている。そして最後の、死を前にしたベツドから頂いたボールペン書きの葉書は、それまでのものと違い、字の並びを図案化して繋いで、言葉に表しようのない一通である。

計報に触れてわたしは、新子さんに宛てて、最後の手紙を書いた。さて新子さんからはどのような返事が来るだろうか。

「出石さん、今回の文章はダメー」とうれしい辛口の評が来るだろうか。

こうやって繋がっていくカアカアと

新子

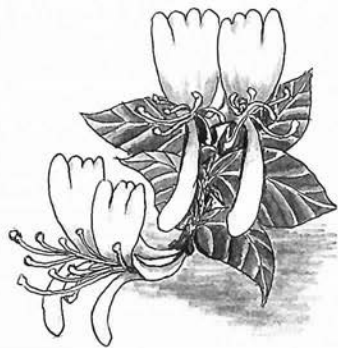


■出石アカル(いずし・あかる)一九四三年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒークップの耳」(編集工房「ア刊」)にて、二〇〇二年度第三十二回フルメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けの

ハンター



ハンター肖像

すいかずらの花開く

生田川の川尻の東に小野浜と呼ばれる砂浜が広がっていた。川尻の西は兵庫港で、その北には外国人居留地が続ぎ、活気のある地域へとめざましい変貌をとげる兆しがふんふんと漂っていたが、この小野浜はまだ自然のままの大地が広がっていた。ここに、先見の明に富むキルビーとハンターが鉄工所を設けたのである。明治二年八月にこの鉄工所を開設するのを機にキルビー商会は屠牛場兼牛肉直売ビジネスをやめた。実はキルビー商会の牛肉ビジネスが世間で話題になるにつけ、やつかみを持つ輩も現れて、柴六の酒蔵の周辺からは

三条杜夫
絵・谷口和市

「牛を殺すのがむづかしい」

とか

「生肉の臭いがたまらない」

などあることないことを交えてビジネスの邪魔になる流言飛語がとりざたされるようになっていたのである。

「ジャパニーズ、他人ノプライバシーニ干渉シスギル」

気性の激しいキルビーがいきどうった。

「都合イイ時、オイシイト言ッテ食ベナガラ、私タチノビジネスサクセスヲネタンデ、邪魔スル

コト許セナイ

おだやかなハンターが言う。

「コレマデノ日本ニナイコト、私タチャッテキマシタ。ココマデ大々のニナツタカラ、柴六付近ノ人タチ本当ニ迷惑シテイルノカモシレマセン。私タチチヨウド他ノプラン考エテマス。今、チェンジノチャンスカモワカリマセン。イエ、チャンスニシマシヨウ」

気性が激しくとも、キルビーはハンターの意見には素直に耳を傾ける。だから、二人は名コンビなのである。こんな事情もあって、キルビー商会は牛肉ビジネスから撤退した。柴六の酒蔵付近の人々の取った行動は今にいう住民パワーのはしりである。キルビー商会の牛肉ビジネスは既に真似をする者が出て来ていた。日本人が経営する鳥獣売込商社が出来ていたほか、英国人ヨーボーが、生田川尻の東に屠牛場を開設した。

このように、誰かが新しいことをやって成功するとすぐに真似をする習性も、この明治の初期に早くも日本のビジネス界に根付いたのである。

皮肉にもヨーボーの屠牛場の東にキルビーの経営する小野浜鉄工所があった。捨て去ったものにも未練は覚えない。情熱を燃やすべき夢は他にいくらでもある。それがキルビー、ハンターの共通した考え方であった。

鉄工所開設に当たって、キルビーに助成したいと名乗り出る英国人が二人も現れた。ハーガンとティラーである。彼らは実務はさっぱりわからな

いが、資金だけを出すと言うのであった。キルビーにとっては好都合であった。新しい事業を始めには資金が必要なのはこの時代にあっても同様であった。

「コチラカラ頼ミニ行ッテモOKシテクレルカドウカワカラナイ。ダノニ、向コウカラサポートノ申シ入レ、コレヲ断ルノデハビジネス失格ダ」

キルビーの合理的判断が二人の出資者を受け入れる結論を導いた。この時代、株式制度はまだ誕生していないが、のちの株式や出資制度のはしりともいえるものであった。

資金面のほか、実際の業務面で今にいうスタッフとして抜擢されたのは和歌山神前（こうざき）出身の秋月清十郎である。彼は神前家の生まれながら紀州藩士・秋月勘三右衛門の跡目を継いで秋月姓を名乗っていた。侍の最後の時代に、秋月は西洋の事情を勉強したいと意欲を燃やし、兵庫にやって来ていたのである。志を同じくする者は運命の糸に操られるかのように相い寄るものである。新規事業開始に向けてスカウトされた秋月を部下に迎えて、ハンターは工事監督として未知の分野の仕事に挑戦することになった。

自分より十四歳も年上のこの元紀州藩士をハンターは気に入る、肝胆相照らす仲となった。秋月もまた年下のハンターを尊敬し、積極的に西洋人から色々なことを学ぼうとする謙虚な姿勢を影日向なく見せていた。この日本の侍にハンターは信頼も寄せ、単に仕事上の付き合いにとどまらず、きわめて個人的なこと、つまり、ハンターが昨今

最も深い関心を抱いている日本女性、平野愛子に對する自分の思いなども正直に秋月に相談するのであつた。

「いいじゃないですか。人が人を思うのに国境はないと自分は思います」

この時代にしてみれば、驚くほど進んだものの考え方をする秋月であつた。ハンターにしても、日本の侍はもつと堅苦しい考え方をしても仕方がないと思うのに、この侍は素直に時世時節の流れに對應する。こんな日本人もいることを知つてハンターは百万の味方を得たような心強い気持ちになつたのであつた。

小野浜鐵工所は鐵工所といながら、最初に手がけたのは木造の蒸氣船である。肥後藩が汽船の建造を計画し、兵庫に誕生した小野浜鐵工所のことを聞き及んで發注してきた。「舞鶴丸」百七十一、五トン。この監督がハンターで、秋月が助ける。これまで、日本でやつたことのない全く新しいビジネスに一年と数ヶ月、ハンターと秋月は神經を集中することとなつた。1860年に日米修好通商条約批准のために、アメリカサンフランシスコへ日本の船を仕立てて出かけるに当たり、勝海舟の進言に従つて幕府が帆船兼蒸氣船「咸臨丸」を建造させてはいた。しかし、それは当時唯一国交のあつたオランダで造らせたものであつた。日本国内で蒸氣船を造るのはおそらく自分たちが最初のことだと思つて、ハンターはいやがうえにも胸の高鳴りを覚えるのであつた。

「私ノ国ノジェームス・ワット、蒸氣機関發明シ、

産業革命ノ原動力トナリマシタ。蒸氣機関使ッテ私、日本ノ船造リタイノデス」

思いを寄せる愛子に自分の働きぶりを示すためにも、ハンターは何としても蒸氣船を造りたいと意欲をみなぎらせるのであつた。

忙しい仕事のあいまをぬつて、ハンターは平野家との付き合いも大事にした。折りを見ては大阪に向き、平野家を訪問する。ハンターに代わつて秋月が造船現場の指揮を引き受けてくれるからこそ、ハンターが大阪行きを見つけることが出来るのであつた。

ハンターの訪問を主人の常助も夫人の菊子も四人の子供たちも心から歓迎する。英国から取り寄せた新薬を持参するというキルビー商会医薬品部の仕事をも兼ねてハンターは行動し、この西洋の新薬が平野商店の名声を上げることにもつながつていた。平野は他の薬問屋にない西洋の珍しい薬を扱うということが、評判になり、老舗の店をいっそう繁盛させる一つの要因ともなつていた。

ハンターは訪れるたびに、造船の進み具合を報告するのがお決まりのようになっていた。それほど、ハンターにとつて造船というビジネスは自分の情熱の大半を注ぐべきものであつた。そして、残りの大半の情熱は、この平野家の長女、愛子へと注がれた。

「今、蒸氣船トイウ最新ノ技術ヲ木造船デ実現スルベク頑張ッテマス。キットイイ船造ッテミセマスヨ」

ハンターの話しに愛子と他の三人の子供たちが目を輝かせて耳を傾ける。

「私ガアイルランドカラ日本来タ時ハ帆船デシタ。コレカラハ蒸気船ノ時代デス。勝 海舟サンガサンフランシスコニ行ッタ九年前ノ威臨丸ハ帆船ト蒸気船ノ両方ノ機能持ッテマシタ。日本ニ帰国シテ、今カラ6年前、兵庫ニ海軍操練所造ッタ時、蒸気ヲ起コス燃料ヲ兵庫デ調達シヨウト、海舟サンハ兵庫長田ノ鷹取山カラ石炭ヲ掘ラセタンデスヨ」

この国が好きで好きで仕方なくなっているハンターであることに加え、米田左門をはじめ伊藤博文など付き合う人物が世間への影響力を持った人たちであることから、平凡な日本人以上に世間の事情に明るくなっているハンターであった。

「へえ、兵庫で石炭が出るのですか？」

主人の常助が大いに関心を示す。

「鷹取山石炭採掘場ヲ盛リ上ゲヨウト、勝サン考エタラシイデスガ、1865年ニ海軍操練所ガ閉鎖サレルト同時ニ、鷹取炭坑モ自然消滅シマシタ」
「でも、勝さんはどうして、海軍操練所を兵庫に設けたのでしょうか？」

愛子が疑問を投げかける。

「ソレハ、網屋吉兵衛サンノ船タデ場ガアッタカラダソウデス」

「船たで場、なんですか？ それ」

菊子も興味をそそられる。

「船ノ底ニ貝殻ヤ船虫ナドガ付イテ船ガ走りニククナルノデ、船ノ底ヲ修理スル所デス」

のちのドックである。網屋のドックがあつたからこそ、勝 海舟は兵庫に海軍操練所を設けるよう幕府に進言して実現した。

「私ハ周リヲ海ニ囲マレタ日本ダカラ船ヲ造ル技術磨クベキダト思イマス。私ガ今手ガケテイル舞鶴丸、木ノ船デスガ、イツカ鉄ノ船造リタイデス」
きつぱりと言ひ切る異人の顔を常助はさも頼もしいといわんばかりに見守る。

「ハンターさん、もし、資金面でお手伝いさせていただけようでしたら遠慮なくおっしゃってください。平野常助商店、娘の命の恩人のハンターさんのためなら、どんなことでもしますから」
菊子も同様に言う。

「本当ですよ、ハンターさん、どんなことでもおっしゃって下さいね。愛子を助けて下さったハンターさんへの恩返しに何でも致しますから」

「ソレナラ、一ツダケオ願イアリマス」

素直にハンターが言うので、居合わせたみんなは一体何事かと、身を乗り出す。

「ハンターさんの頼みならいやとは言いません」

常助は言つてのけた。

「いくらぐらい用立てればいいですか？」

「才金デハアリマセン」

「何んですか？」

げげんそうに問い返す常助の顔をハンターはまじまじとながめる。そのハンターの顔を常助がじつと見る。ハンターは少しためらいながら、しかし、意を決して言つた。

「ミス愛子、私ニ下サイ」

ストレートな一言だった。居並ぶみんながいつせいに驚きの表情になると、愛子が顔を真っ赤にするのと同時だった。

次の瞬間、ハンターは正座し直すと、畳に顔をこすりつけるようにお辞儀して、そのまま頭を上げようとしなかった。常助は娘の気持ちを確かめるように、おそるおそる愛子に聞く。

「どうなんだ？ 愛子は」

愛子は答えることをせず、さっと席を立つと、手で顔を覆いながら、隣の座敷に身を隠す。その仕草から家族の誰もが愛子の気持ちを讀みとった。隣の座敷の襖のそばで、愛子は立ちつくし、顔を覆った両手の指の間から涙をこぼした。一昨年、高熱で死にかけていた自分の命を助けてくれた西洋の青年、ハンターに愛子はあの時から自分の命は彼のなすがままだと思っていた。ハンターの言葉がたまらなく嬉しかった。涙がとまらなくなった。家族は愛子をそっとしていた。隣の座敷では、常助がハンターに頭を下げる。

「よろしく、お願い致します」

常助はそれだけ言うのがやっとだった。そのままハンターに負けないくらい顔を強く畳に押しつけた。

「お願い致します」

菊子が同じようにお辞儀をするのと三人の子供たちが顔を畳にこすりつけるのと同時だった。ハンターはいつまでも身を起こそうとはしない。日本流真礼で彼なりに一生一度の運命をここに決めるようとしている態度が誰にも理解出来た。常助も

菊子も三人の子供たちも、ただただ、頭を下げ続け、ハンターに心からの礼儀を表明するのだった。愛子が涙を浮かべたまま、恥ずかしそうに、みんなが待つ座敷に戻ってきた。ハンターがトランクから何やら取り出すと、愛子のそばへ近づいた。ハンターが手にしているもの、それは指輪だった。アイルランドを出る時、母がそっと渡してくれたものである。十五歳で国を出る息子に母は自分が大切にしてきた指輪を贈った。あれから十三年、母が自分に託した指輪を今こそ役に立てるべき時だとハンターは思ったのである。

「マザーガ大事ニシテイタリング、ミス愛子、持ッテイテ下サイ」

愛子の左手の薬指にハンターは母の指輪をはめた。期せずして、座敷中に拍手が湧き起こる。愛子の目からまたしても涙があふれ出た。その目に庭木の白い花が映った。縁先の向こうに折しも満開の忍冬（すいかずら）。緑の葉の間に細長い筒型の花が無数に付いているが、よく見ると、その花が二つずつ並んで咲くという珍しい庭木であった。めざとく見つけたハンターが言う。

「オウ、カップリング・フラワー！、コノ花ノヨウニ私、ミス愛子大切ニシマス」

冬に絶えて葉を落とさず、初夏に花を開かせることから「忍冬」と書いて「すいかずら」と読む。きわめて日本的なこの植物が、この日からハンターと愛子の二人にとって生涯忘れないものとなった。

居留地では、最近英国人・カペルが十六番館で洋服店を開業していた。東西に走る前町と南北の播磨町が交わるところで、西洋人向けの洋服の仕立てをビジネスにしていた。

その東隣の十五番区画にはのちにアメリカ領事館が建つ。その東の南北の道の浪花町を隔てて、十四番区画にキルビー商会の建物がほどなく完成しようとしていた。木造の西洋風建物で事務所と住まいの両方に使えるものだった。

「十三番館もすぐに建築にかかりましょうや」

留吉がキルビーを促していた。ハンターが愛子と共に所帯を持つとするなら、もう一軒、建物が必要になると予想してのことである。

「留吉サン、急イデ下サイ」



キルビーの決断はすばやい。とりあえず、建ち上がった十四番館をハンターと愛子の新居にするようキルビーが気を遣った。「我が家が

らハンターさんがいなくなるのは寂しいねえ。でもねえ、自分が作った家に住んでもらうために寂しい思いをしなきゃあならないんですからね、世話はないですよね」

留吉が苦笑する。

「ハンターさん、遊びに行かせて下さい」稲次郎が今年十八歳になって、立派に父の大工仕事を助けるようになっていたのだ。『ビードロの家』に負けないほど値打ちのあるキルビー館にした積もりですよ」

博識家の米田左門の弟子である稲次郎だけに面子にかけて、内容をあれこれ工夫した館に仕上げた積もりだった。例えば、二階のバルコニー。この時代の日本家屋は平屋で当たり前なのに、稲次郎は西洋の家を見習って二階建てにすることを勧めた。

「バルコニーから港の様子を見てもらいます。船の出入りを見るだけで、貿易に役にたちます。それに、海のはるか彼方に懐かしい故郷の山や川を思い浮かべるのにバルコニーはなくてはならないものになります」

ハンターにとっては懐かしい故郷、愛子にとつては、自分の夫となる人の生まれた国を思い描くのもつてこいのバルコニーである。 つづく



■三条杜夫(さんじょう・もりお)
フリーアナウンサー、放送作家。ルポライターの経て、放送業界へ。経験ももつて地域活性化講師としての活動も評価されている。著書に「いのち結んで」「宝の道七福神めぐり」「そうゆう人たち」など。